

多くの経験をした 幼少期

西川登町にある「えるもの社」で過ごされている江口さんは御年98歳。令和4年に施設に入所されましたが、それまでは自宅で奥様の介護をされていたそうです。大正15年（昭和元年）に西川登町小田志で8人兄弟の長男として生まれ、小学校卒業後は郵便局で2年ほど集配の業務を行いました。江口さんが生まれ育った時代は戦争の真っただ中。国民徴用令が出された際は、10代半ばという年齢で家を出て、長崎県大村市にある第21海軍航空廠で飛行機の製造業務に勤められました。大村市で青年時代を過ごされた江口さんは、戦争の被害にもあっており「身体中に

被弾した跡が残っていて、今でもたまに傷跡が痛むんです」と微笑みながら答えてくださいました。

仕事一筋！ 弓野人形職人

大村での飛行機製造業務が終わった西川登町に戻ってきた江口さんは、家業である弓野人形づくりをするように。10代の頃から80代半ばの目が悪くなる時まで、毎日人形づくりに向き合っていました。徹夜をする日もあった。忙しい時期もあり、特に年末年始は全国各地から制作の依頼が殺到していたそう。締切も決まっている上に、注文の数も多いため、ご飯を食べたらすぐ職場に戻るなど仕事場での日を過ごしていたとのこと。仕事を終えた後に飲むお酒

を楽しみに、忙しい日々を乗り越えてきた江口さん。「大変だった」とお話しされるその表情には笑顔が垣間見られ、人形づくりに誇りとやりがいを持たれていたのだと感じました。そんな仕事一筋だった江口さんの唯一の趣味は登山をすること。各地の山を登ってはリフレッシュしていたとお話しされていました。



江口さんが手に持たれているものは江口人形店の弓野人形。ご子息にあたる誠二さんから「取材に使ってもらい、そのまま施設に飾ってください」とお預かりしたものです。写真撮影時にお渡しすると「これは誰が作ったものかな？」と嬉しそうにまじまじと見られていました。

▼ 作業場に並ぶ恵比寿の面飾り



健康の秘訣

長年にわたり全国各地で愛される弓野人形の職人として仕事と向き合い続けた江口さん。「好きな食べ物はなんですか？」と聞くと、一瞬考えられました。「好き嫌いはありません。何でも食べます」とのこと。「幼少期は贅沢がでさず出されたものは食べなければいけない時代だっ

たので」と理由を話され納得しました。話しかけられた言葉は理解され、自分の考えを言葉にして伝える江口さん。新型コロナウイルスに感染された時は治るまで1〜2カ月かかったそうですが、後遺症はなく、顔色も良く元気なご様子。「健康の秘訣はなんですか？」とお聞きしたところ、特にないとのことでしたが、長年の手先を使う作業が今の健康に活かされているのではないかと思います。現在、施設内ではゆつくりと過ごされている一方、遊びの時間になると体操や風船パレーを施設の皆さんと楽しまれているのだそう。「ひとりであるのが好きです」と話す江口さんの笑顔は穏やかで周りの方に愛されていることが伝わってきました。

弓野人形とは？

弓野人形は明治15（1882）年、博多人形師の原田亀次郎が、九州各地で修業した後に、西川登町弓野地区で作った土人形が始まりと言われています。亀次郎は弓野の地で職人を育て、人形の製法を確立。恵比寿、大黒の面飾りを京阪神へも出荷しました。昭和初期には菓子メーカー・グリコのおま

けとして人形を大量に生産したこともありました。弓野人形は博多人形のながれを汲むことから、古いものはおいらん人形や武者人形など大型人形が多かったのですが、今は小さな「かわいらしい」サイズの人形が主力。胡粉を厚く塗ったぼったりとした形と、鮮やかな色彩が魅力で、佐賀の節句に欠かせない人形として親しまれてきました。デザインが多彩で、数百種類もの型が現存しています。



江口人形店
現在5代目の江口峯さんは、県業業試験場や長崎県佐見町で技術を学んだ後に3代目江口勇三郎さんの元で修行を積み、技術を継承し制作にあたっています。
住所 武雄市西川登町大字小田志14900
TEL 0954-28-2028
営業時間 8:00～17:00（日曜定休）